

新規企画書

○タイトル 竜とメタルな FrameWorks 竜刻の FrameWorks

『一蓮托生は竜も喰わない』

『素寒貧なボクの竜の喰いかた』

『素寒貧な墓守は竜も喰わない』

『FRAME NEW WORLD』

フレーム×新世界×

『竜とメタルな FrameWorks』

『素寒貧な墓守は竜も喰わない』

『ゼロで表現できる機械仕掛けな竜のサガ』

『

○キャッチコピー

『メタリックファンタジー』

「我々は——竜/星の本当の顔を知らない」

「サイバーチックな泥臭い戦い」

○コンセプト

冒険系謎解きファンタジー

メタリックファンタジー

ミリタリー風ファンタジー

大自然と大文明が衝突した結果人類が衰退し、生物として最終進化を果たしたメタルな『竜』という存在が跋扈するこの世界で、竜を喰った少年がこの世界に遺ったお宝をトレジャーハントする物語。

簡単に言えばマシンチックな竜がめっちゃ多い荒廃した世界で、バイク乗ったりロマン武器持ちながらお宝探しをするってこと。

拠点より向こう側にある「未開拓領域」とされる場所の攻略、未開拓領域の「中継点」「補給ポイント」として各地に存在する街（開拓がはじまった頃からいくつか存在し、始まりの街であるエアリアルを起点に支援を行われていた）を転々とし、その地で生まれる謎や事件を解決し、段々と真実に近づいていくというもの。

依頼 → 宝探し → 謎解き → 戦闘 というのが基本の流れ

○キャラクター

始郎・アスマ

主人公。

ジャンクハンター&トレジャーハンター。

黒い戦闘服と黒のだんだら羽織。

生まれ自体は普通だったが、竜の戦闘に巻き込まれて両親を失い、死にかけた事によって『竜喰い』を行い、普通の人間では到底生み出せないフィジカルとタフさを持つ。ファイターとして十二分の力を備えながら竜を狩らず趣味にばかり身を費やすその様から「スクラップ」と街で所属するファイターたちからは揶揄されている。

性格は基本的に能天気で実直だがかなり自身の欲望に忠実でついつい物欲が暴走しがち。自身のライフワークであるお宝集めという名のガラクタ収集・ジャンクパーツ集めを優先する。

孵化少女、静流・ハバリの覚醒と共に彼女の引き起こす事件に徐々に関わり、巻き込まれていくことになる。

「お前を見つけたのは——俺だ！」

静流・ハバリ

ヒロイン1

実年齢1000歳の素直クールな十七歳。

白い長髪に黒いメッシュが入った美女。

ファイターとして高い戦闘能力の持ち主であり、粒子格納してある槍を様々なシチュエーションで使いこなして戦う。

性格は

千年前の大文明と大自然の大戦において「ワルキューレ」と呼ばれる精鋭部隊として竜と戦い続けていたが敗戦し、カプセルでユールドスリープに陥っていた所を始郎によって凍結解除され、現代に再び蘇ることになる。最初こそ今と現代の違いに戸惑っていたものの、持ち前の順応力の高さと優秀さを以て順応。かつてはできなかった生活を謳歌する。

かつて『人類側から恐れられたうえ、ワルキューレの竜を駆る技術に目を付けられ、大國イーラから狙われることになる。そして星の謎と脅威に立ち向かう。

「ええ——ワタンは貴方の善性を信じてますとも」

クロエ・マクラウド

ヒロイン2

突撃優雅の十八抜刀歳。

粒子ブレードの使い手で、相手の装甲を切り落として剥がしながら、強力なディスチャージを叩きこむ戦法を取っている。ついたあだ名は「黒剣」。

性格は飄々としたお人好しで、そのどこか芯の強さを感じさせる声には常にどこか優雅さを帯びている。ただ戦士として生活環境を整えられていた所為で物事の要求値が高く、結果としてどこか我儘で欲張りな面が目立つようになる。不幸体質の持ち主で、何かとトラブルを持ち込んで周囲を巻き込んでいる。

任務で静流をイーラの刺客だと誤解し、攻撃を仕掛けてしまう。

「斬り抜けるわよ！」

「叩き斬る」

ミレイナ・ストラウス

金髪幼女ネキ

22歳

メカニック兼研究者。大出力粒子演算機「アルセデス」を管理・整備できる現状唯一の人間であるが、表向きはジャンクパーツなどを買取・整備修理をしている廃品回収・整備業者。

一人称がオレで身長149センチの合法ロリ。普段は街の外れにある放棄地区で居を構えている。

基本的にドライで言い分に容赦がない合理主義者だが、本人が気づかぬうちに出している人の好さと面倒見の良さがその言動から溢れ出ている為、影の人気者として皆に慕われている。仇名は「姐さん」。

実はファイターのライセンス持ち。珍しい「弓使い」で、ハーブの様な数種類もの「竜のヒゲ」による粒子の使い分けと伝達を行うことで多彩な「矢」を生み出すことが出来る。見えない矢だったり、相性有利の矢だったりなど。

「ほう、オレ好みの骨董品じゃないか」

「オレは天才だ——装備を整備させてくれればお前たちを死なす様なへまはしない」

マスク男（仙都・カグラギ） ※データのみ。次章にて登場。

大国「イーラ」の刺客。作中では「マスク男」として物語を終始攪乱し、今回の事件のフィクサー&実行犯として活動する。

対竜のブラスターを人間に命中させる程の射撃センスと技量を以て戦い、中距離武器による近距離戦闘を得意としている。

ラウル・エンフィールド

糸目

年齢不詳

エアリアルリーダーを務めているギルドに所属するギルドのトップ。実質街のトップを張っている人である。

一卷では登場しないが、物語においては『賢者タイプ』の人間として主人公たちを導いたり、時に対立したりする。

○世界設定

成長しすぎた大文明と大自然がずっと昔に衝突し、自然側が勝利したお陰で自分らの住む星を竜たちの生態系によって支配された人類の話。

人々の間では竜とは「畏怖」と「嫌悪」の対象であり、その中でも「竜喰い」は最も穢れた罪だと言われている。

○用語

・ファイター

太古の大戦以前から存在し、現在でもその形を残している竜狩りたちの名前。現在は現地調査や物資調達、生態系のコントロールの為の竜の討伐など、いわゆるこの世界における荒事を一身に受ける役割となっている。

・エリオン・システム

『エリオン粒子』と呼ばれる金属内に存在する粒子を操る人類が竜に対抗する為に生み出したシステム。これを攻撃、感知、防御などのファイターとして戦う機能を支えるの

に必須となっている。

エリオン粒子そのものは『アダマンタイト』と呼ばれる金属に内包されており、これらは粒子を生み出す機能を持ち得ているが、粒子の容量自体は鉱石の個性によって左右されている。

・ 竜機大戦

数百年前、文明と自然の衝突によって生まれた終末戦争。有り体に言えば人類の自業自得によって起きた『自然の自浄作用』であり、「始まりの竜」の出現によって人類側の敗北を迎えて衰退し、自然側はその力を長い年月を経て暴走させることになる。

・ 粒子装甲 フレーム

人類が竜に対抗する為に生み出した機構の一つ。防御の要となるボディースーツの『基礎フレーム』と、装備に「個性」を与える為に様々な機能を付け加える『外部フレーム』から構成されている。

仕組みとしては金属内にある粒子を稼働させて、金属の効果を拡張、変異させて使う。普段はバックル内に『粒子格納機能』というものによって粒子変換させて表に出し、オフの時はバックルのみの扱いとなっている。

・ 解放 ディスチャージ

エリオン粒子をフレームの規格を超えるレベルで武装に流しこみ、『竜の攻撃を人間体で再現する』ことを目的とした機能。カードリッジ式で、竜のデータを内包してフレーム全体を流れるエリオン粒子にそれらを反映させることで機能させている。普段は再度バックルのホルダー内にストックしている。

いわゆる必殺技にあたり、フレームの各所に指し込み口が存在していたり、時には武装そのものに指し込み口があったりする。

・ 武装大国『イーラ』

いわゆる黒幕の一つ。かつて竜と戦った旧人類の人間で構成された絶対王政の国。その内情は長い年月を経て腐り果て、新人類の差別や竜への過激思想などのもので溢れ返っている。

・ 粒子演算機「アルセデス」

エリオン粒子をエネルギーにあらゆる演算・解析を可能とする予測演算機。

クローエが所属する組織のハンターはこの機械が出す結論や指令によって依頼を遂行する。

管理者曰く「気まぐれ」であり、本当に危険な時、あるいは必要を要するときにしかその演算能力を発揮することがないという取り回しがやっかいな機能を持っている代物。

○ストーリー 「孵化少女」

第一章 プロローグ

- ・ 静流の夢。彼女はコレを見た直後に卵から覚醒する。
- ・ 明晰夢にしては明らかに血生臭いモノ。
- ・ その中心にいるのは——竜擬きの戦士だった。
- ・ 尻尾の蒼。咆哮の赤。竜翼の緑。野生の紫。それらを切り替えて戦う存在。
- ・ すべての竜を封印した後——彼はそのその宝玉を宿したドライバーだけを残して崩れ落ちた。

・ 戦場跡である遺跡を逃走する男女二人。始郎とクロエ。背後には大量の罠とそれを理不尽に踏破する「カテゴリー：レックス」の姿。

・ 背負う大型カプセルを武器にする始郎。洗練された斬撃でそれをいなしていくクロエ。対照的な戦闘スタイルを持つ二人を描いていく。

・ ビークルに乗る二人。任務に於いて回収を頼まれたものの確認、そして始郎がくすねてきた大型のカプセル。コレが原因で大型のレックスに追いかけていたことを知り、バックシートで始郎をタコ殴りにするクロエ。

- ・ そうやってドタバタな感じでプロローグが終わる。
- ・ おいでませ——此処は竜と鋼が支配する世界。

・ 街に到着する。報告に行くクロエに待機を命じられた始郎はでギルドの連中と出会う。

その後、道中でこの街を支配している『ギルド』の連中と会う。彼を『スクラップ』と揶揄するところヒロイン2のクロエ・マクラウドにみられ、「少なくともあんたたちよりはマシ」だと言ってくれる。お人好しの彼女らしい言い分である。彼女自身、自分がああいった事で立場が悪くなってしまうのではと気にしていたらしいが、始郎は「じゃんじゃん助けてくれるから俺はお陰で寂しくないぞ」と励ましてくれる。

・

第二章 孵化少女

後日、街に出る。ドローンが浮く上空を見て、ギルドの警備が先日のこともあって強化されている事を確認しながらカプセルという卵から孵った彼女——静流・ハバリの身の上

話を聞きながら街に出向いていた。

目を開けて早々耳にしたのは「おはようございます」という堅苦しい挨拶。彼は自分の立場と現状を理解しているのかと問いかけるが、そう言いつつそんな人間爆弾を街へ連れ出す始郎自身も大概だと言われ、何も言い返せなくなる。そして、街を見たいという彼女の要求に従いながら彼女の身の上話。自分が千年も昔にコールドスリープの状態で作られたこと、そして自分が「とある部隊」に所属して竜と戦って——敗北したことを知る。

だから、見てみたかったと。自分が守れたものがあったのか、戦う為に生み出されたのに、敗北しか齎せなかった自分の結果がコレだと。

空が青く、人の怯えた顔もない。そこでは皆が笑っていて——必死だけど、満ち足りていた。

果たして——自分が戦った意味とは何だったのだろうか、と。

そこで始郎は、自分の境遇となんとなく重ね合わせる。虚しいとわかってても、お前は戦ったんだろ、と。

意味なんて見つかるわけがない。それが戦いに捧げた人生だとしたらなおさらのことである。でも、「ちゃんと生きていれば」きっとその意味も理由もそのうち見つかるだろ、と。なんとなくだが励ます。生きるって、そういうことだろ、と彼は言う。

そしてクロエに連絡をする。先日からイーラの大国について調査を進めていた静流は、その動向を分析していた。始郎を監視兼保護に、クロエは下手人の手がかりを探しに調査へ。彼女の上司の反応はどうだったと聞いて「一任する」とのことらしいという事を聞く。

『彼女の状況はどう？』

「……………あー、なんていうか」

街の名物である豆で加工した肉料理に齧りついて火傷してる光景。

「……………無害？」

『は？』

帰って扱いについて悩んでいると、家の前にナニカの封筒が。いまどき紙類の届けものなんて珍しいと思いながら開封すると、「君の秘密を知っている」と書かれたメッセージカードと、一つのデータ端末。そこで示されているのは、とある違法大会——ファイターの業界では「殺陣サーカス」と呼ばれるもの。

第三章 殺陣サーカス

- ・依頼を遂行し、会場に参加する。商品となったのはとある『フレームバックル』。
 - ・静流はあのバックル目当てで、始郎は静流の手がかりかつお前が欲しいものなら頑張っ
- て手に入れようとのこと、静流はこの会場にいるやたら強い『大国イーラの刺客』の確保、

マスク男はクロエと同じく『バックルの確保』。

・クロエの静流への勘違い、そこで互いのディスチャージがぶつかり合おうとした直後、会場がマスク男の攻撃によって崩壊する。

第四章 鋼鉄の闘士

・地下の迷宮と竜の巣からの脱出。なお、死ぬほど連携が下手くそである。

・地下の竜の巣の『ヌシ』に遭遇。そこで悪戦苦闘しつつ倒す。

・そこで、静流と始郎が後ろから撃たれる。マスクの男だ。

・狙いは孵化少女のクロエの身柄と古代のバックル。血を流して倒れる二人に、大国イーラに連れていかれかけるも、そこで彼はセリフを吐く。

「お前を見つけたのは俺だ」

「ソイツは、俺のお宝なんだよ」

「俺の宝を奪う奴は誰であろうと全力で潰す。わかったか陰険マスク野郎」

・ボコられる。エリオン粒子も完全に切れ、変身が解けて死にかける。が、不条理に抗う、『何も失わない力』を望んだ結果、その答えに古代のバックルが応えたのだ。

・今まで循環効率の最悪だったエリオン粒子が完全に循環し、かつてない程に調子が良い身体で、マスク野郎と渡り合う。が、やはり決定打に掛ける。

・クロエと静流が協力。クロエの人斬りとしての才能、静流のレリック、人間離れした始郎のスペック、今ある力を全ての手を使ってみんなで倒す。

ディスチャージ。

エピローグ

・怪我人たる彼らの回収。医務室。クロエと始郎は仲良く医療中。

「あの子はどうするのよ……イーラが関わっているとわかった以上、貴方だけの問題じゃない。それにあのバックルの適合者とわかった以上、狙われる身になる」

「……まあ、そうだな。でも啖呵切った以上、何とかする。あいつは独りにしちゃだめなんだよ」

「つまりノープランってことね」

「うるせえ、学のねえ俺にカッコつける事以外のこと求めんな。というわけで、クロエさん、ギルドんどこでそこんところの対策お願いしますわ」

「ここにきて開き直らないでよ……」

・場所は変わってイーラの地。そこで折檻される仙都・カグラギ。

そこで夥しい拷問に耐えながら、次の任務を言い渡される。

- ・ 始郎ら三人は事件を解決した人間として、クロエの上司に呼び出される。
- ・ 未開拓領域に点在する街を復帰させること
- ・ イーラの追っ手から身を隠して活動するのもってこいな仕事であり、そして何より、「始郎が知りたいことが知れる」とカレに向けて言う。
- ・ ビークルを用意。次の街へ向かう。